

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 2. 事前研究の経過

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002629">https://doi.org/10.15084/00002629</a>

## 2. 事前研究の経過

大西拓一郎

### 2.1. 事前研究

2009年10月に国立国語研究所は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構の一員として新たにスタートした。その際にすべてのプロジェクトが新しく立ち上がり、われわれの共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」もそのひとつに位置付けられるものである。

2009年度はプロジェクトの初年度になるが、10月からの開始であったために、年度単位の中での研究期間は半年のみという短期に限定されることとなった。そのこともあってほとんどのプロジェクトは、2009年度を2010年度からの本格スタートのための「事前研究」の期間として位置付けた。なお、2009年度は中期計画期間の最終年度であり、2010年度は新しい中期計画期間の開始年度にあたる。

### 2.2. 全国方言調査委員会

われわれのプロジェクトは上記のように研究所の再スタートと同時に立ち上がったが、実はゼロからスタートしたものではない。それ以前から、研究所内外の研究者で構成する「全国方言調査委員会」という名称の組織を設け、大学共同利用機関移管後に新規の全国方言調査を本格的に実施することを念頭においた全国方言準備調査（以下、「準備調査」）を移管直前の2008年度にすでに実施していた。

全国方言調査委員会は、2006年度に立ち上げた組織である。以下にメンバーを列挙する（括弧内は参加開始年度）。

朝日祥之（2006）、新井小枝子（2006）、大西拓一郎（2006）、沖裕子（2006）、尾崎喜光（2006）、狩俣繁久（2008）、岸江信介（2008）、木部暢子（2006）、小西いずみ（2006）、小林隆（2006）、渋谷勝己（2006）、杉村孝夫（2008）、高橋顕志（2006）、高木千恵（2006）、竹田晃子（2006）、都染直也（2006）、中井精一（2006）、日高水穂（2006）、船木礼子（2006）、松丸真大（2007）、三井はるみ（2006）、吉田雅子（2006）、鎌水兼貴（2007）、横山詔一（2007）

なお、尾崎と横山は現在の共同研究プロジェクトには参加していない。

### 2.3. 事前研究ワーキンググループ

共同利用機関としての研究所において再スタートしたプロジェクトの中では、準備調査を活かして、全国方言分布調査（以下、「本調査」）に橋渡しし、本格的な全国方言調査を開始させるまでのことを、事前研究の中で実施していくこととした。その際に旧組織である「全国方言調査委員会」の若手メンバーを中心に事前研究のためのワーキンググルー

プ（以下、「WG」）を構成し、「調査項目の構築」「調査結果データベースの構築」「既刊言語地図データベースの構築」という3本を軸に本調査ための基盤固めを行った。

各テーマは、次のメンバーで構成した。筆頭者はそれぞれのグループの代表として役割を果たした。

「調査項目の構築」（吉田（リーダー）、日高、船木、高木、新井、小西、竹田）

「調査結果データベースの構築」（鎌水（リーダー）、松丸、小西）

「既刊言語地図データベースの構築」（竹田（リーダー）、吉田）

WGは、2009年11月、2010年1月、2010年3月にメンバー全員による会議を開催しながらそれぞれの作業を進めた。その中で、本調査の中核となる項目、調査結果をデータベース化するための基本方針が固められた。また、既刊言語地図のデータベース化は検索しやすい形に整えるべく、現在も作業を継続している。

WGが作業を進めるにあたり、大西はプロジェクトリーダーとして次の点に留意した。それは、WGに対して極力、手や口を出さないということである。ひとつには、この分野をこれから牽引する若手研究者に研究の根幹にあたることを担いながら、力を発揮し、また経験してもらいたかったことにある（この規模の研究この段階はめったに経験できないものである）。もうひとつは、共同研究の私物化の回避を考慮したことである。このプロジェクトを立ち上げるにあたり、大西は解明したい大きな仮説を個人として有している。しかし、大規模に全国の研究者の力を結集するプロジェクトの中では、それを押しつけることは避けたいと考えた。自分はリーダーであるとともにプロジェクトの一員でもあることを肝に銘じた。以上の点は、明言してこなかったこともあって、作業を押しつけている、リーダーシップの欠如のように負の側面でもとらえられたこともあったと推測する。真意が伝わらないのは残念なことではあるが、これくらい多くの人が集まるプロジェクトでは噛みこたえなければならぬことは少なくない。

#### 2.4. 共同研究プロジェクトの推進と事務局

ワーキンググループを中心とした作業は、2010年5月に開催した共同研究打ち合わせ会をめぐりにほぼ終了した（打ち合わせ会は他に2009年12月、2010年3月に開催し、WGの活動を通知している）。その後の作業的内容を伴う研究活動は、研究所のメンバーである大西・鎌水・吉田・竹田が事務局を構成することでそれを担っていくこととなった。

事前研究に位置付けられるのは、ここまでのことであり、以後は、本格的なプロジェクトの推進になるが、中間的な時期のこともあるので、簡潔に記しておく。

本調査を実施するためには、上記の全国方言調査委員会を引き継ぐメンバー（以下、「旧メンバー」）の共同研究者だけでは不足であることが指摘された。そこで、比較的広い地域を担当することを想定していた旧メンバーから県単位での新しいメンバー案を出してもらったこととした。そして旧メンバーから打診してもらったとともにプロジェクトリーダーの

大西からも電子メールや学会・研究集会等でプロジェクトへの参加依頼を行った。その際に共同研究者の形での参加と調査への協力を中心に行う調査協力者としての参加の二つに分けてプロジェクトに加わってもらうことにした。7月には共同研究のメンバー（共同研究者・調査協力者）がほぼ固まった。メンバーの一覧は、その後の若干の追加もまとめて「研究組織」として本報告書の最後に付載した

2010年7月18日には、共同研究者・調査協力者のほぼ全員が集まる調査説明会を開催した。その時に集まりきれなかった人を対象にした説明会を2010年度には5回（7月24日、7月27日、7月30日、12月6日、2011年2月15日）行った。

以後、メンバーにより調査が実施され、調査結果が報告され、その調査結果の共有化を推進しているが、ここからは事前研究の段階を終え、本格的なプロジェクトの推進になる。